第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第１回委員会

議事要旨

日　　時：平成 20 年 8 月 21 日（木）18:30～

会　　場：武蔵野市役所西 812 会議室

出席委員：高田委員、橘委員、島森委員、渡邉委員、中村委員、井原委員、和久田委員、
　　島田委員、井波委員、増田委員、清本委員、西村委員

１．委嘱状交付式

２．市長挨拶

コミュニティ市民委員会の立ち上げにあたり、邑上市長より挨拶を行った。

３．委員自己紹介

４．議事

（１）正副委員長選出

・事務局より正副委員長の立候補、推薦がないかを聞いた。橘委員より高田委員を委員長に推薦する発言があった。出席者全員の賛同があり、高田委員が委員長に就任することとなった。

・続いて、事務局より、江上委員から、副委員長であれば引き受けてもよいという連絡を受けているとの紹介があり、高田委員長からも推薦する発言があった。出席者全員の賛同があり、江上委員が副委員長に就任することとなった。

（２）委員会運営に関する基準（案）について

・事務局より、資料にもとづき委員会運営に関する基準（案）について説明。

【議　論】

○傍聴人の意見書の扱いについて

・中間答申に対する市民意見と同様に、傍聴人からの意見書にも回答・考えを述べること

を確認。

〇発言者の氏名の公開について

・各委員の発言は、特定の団体の利益代表としてではなく、個人としての発言であること、公開に先立ち、各委員が議事要旨における発言の趣旨を確認・訂正する機会を設けることを確認した上で、議事要旨に発言者の氏名を掲載することに決定。

（３）施策の現状について

・事務局より、資料にもとづきコミュニティ施策の現状について説明。

【議　論】

（高田委員長）　専門館との連携といつも言うが、武蔵野市の特徴として基本的に専門館があまりない。

（井原委員）　利用人数について、名簿を書くところと書かないところがある。自己申告によって使用人数をだいたい 30 人とか 40 人とか書いている場合もあるが、そうしたものが混在して数字として表れているということか。

（事務局）　数字は各コミュニティ協議会で集計を出していただいている。一番分かりにくいのはロビーの人数。集計をしていないので、90 万人の中には入っていない場合がある。数字は概数だと思っていただいたほうがいい。

（橘委員）　一番顕著な例は吉祥寺北コミュニティセンター。ロビーが非常に広く、利用者人数が多い。どこで人数を取るかという問題がある。当センターでは館にいる時間帯をＡＢＣで分けている。午前中ならＡで３時間単位で分け、真ん中のところで人数を取るというルールでやっている。

体育館は、予約の時間帯とフリーの時間帯があるが、予約の時間帯は申込書で人数がつかめるが、フリーの時間帯はなかなかつかめない。

そういうことで北コミの場合は少し利用率が落ちていると思う。非常に広いコミュニティセンターの中に広いフリースペースがロビーも含めて入っているためである。そういう意味で数字の取り方は非常に難しい。

（島森委員）　けやきコミュニティセンターでは、部屋の場合は申込書を出しており、人数が出ている。フリースペースに関しては、当番の方が随時、館の見回りをする際に人数を書くメモ用紙を持って、現在何人いるかを数えている。

（渡邉委員）　八幡町の場合は大変規模が小さいという特徴がある。事前に申込書に団体と利用人数を書いてもらい、利用し終わったら実人数を報告してもらっている。

ロビーがないので１階の部屋が空いている場合はロビー代わりに使ってもらうことにしているが、出入りが非常に激しくて必ずしも人数通りには把握されていない点がある。

（井原委員）　児童室はどの資料を見れば分かるのか。何が置いてあるのか、どんな遊びが許されて、どんな遊びが許されていないのかを知りたい。

もう一つ、体育施設に関して、コミセンが小学校高学年、中学生にとって体を動かせる場所なのかが気になる。ただたむろするためだけの場所になっていたら残念。体育施設でどんなことができるのか。

（事務局）　もう少し細かく調べて資料として提供したい。

（橘委員）　吉祥寺北には体育館がある。スポーツにはそのときの流行りがある。ひところはバレーボールで、そのための時間を取るが、その後ほうっておくと人が来なくなる。今はバスケットと卓球。本当はサッカーだと思うが、体育館でやられると困る。以前はボールを貸し出していたが、サッカーボールがないのでバレーボールを蹴飛ばして壊されてしまうということがあった。ほかにはバドミントンが一時盛り上がって、そのための時間帯を取ったが、結局誰も来なくなった。流行りがあるので、順次対応しながら、自由時間と専用の時間を割り振ってやっている。

ボールやラケットなどを以前は貸していたが、みんな壊されてしまうため貸すのをやめた。マイボールを持ってきてもらう。ボールを貸さなくなったことによって、子どもが悪さはしなくなったということがあった。ある程度方策としてはよかったと思う。そうしないと、いくらボールがあっても予算が大変である。

（中村委員）　コミセンの区域の地図に小学校の学区域を入れてもらいたい。

（増田委員）　中学校の学区域も必要。

（西村委員）　地域福祉も。

（事務局）　うまく見えるようなものを工夫してみたい。

（清本委員）　資料に陳情書で境東部・境南町東部地域にコミュニティセンターを設置してくださいとある。

（高田委員長）　陳情書はもうやっていいのか。

（事務局）　少し待っていただきたい。実際に議論に入ったときに。

（高田委員長）　その議論のときに、例えばさきほどの中学や小学校や、福祉の区域など

と重ねてみると、もしかしたら空白地帯が見えてくるかもしれない。そうするとこれは必要だなということが具体的に言えるので。それはまたもう少し後で。

（島田委員）　区域について､資料の中にコミュニティ構成地域と対象人口が入っている。コミュニティは、このぐらいの人口だからこの地域にしようと決めたのか。漠然としたゾーンがあってという決め方ではないかなと。

（事務局）　もともと 46 年の構想では、円形でだいたいこの辺りと、あまり明確に地域を分けていない。

（島田委員）　利用者も他の区域のコミセンを使ったり、他の区域から利用しに来たりしている。だから利用者と区域は１対１ではない。

（清本委員）　どちらかというと東のほうが多く、西のほうが少ない。人口がなかったと言えばそれまでだが、空白地帯は確かにある。

（事務局）　もともとのコミュニティ構想のときには、最初に、市民の方々に盛り上がりが出て、準備委員会ができて、行政でそこの中の土地を確保した。そのため土地も広いところもあれば狭いところもある。その後どういう施設を作るかは市民の方に考えていただいて、行政が建設する。建設した後は市民の方に管理をお願いするという形であった。そういった経緯があるためばらつきがあるかもしれない。

（４）今後の検討スケジュールについて

・事務局より、資料にもとづき今後の検討スケジュールについて説明。

【議　論】

（井波委員）　第２回の各協議会というのは 16 協議会ということか。

（事務局）　16 協議会全部を集めてやるのか。やり方も含めて委員会の中で決めていただきたい。

（高田委員長）　我々が検討すべきは新しいコミセンのあり方。機能や、それからコミュニティ活動の活性化である。現在の状況は、先ほどの中学生の問題などいろいろなものがあるが、それに対応できるようなところを出せればよい。

　もう一つは、いま盛んになっているＮＰＯ関係、市民活動関係、ボランティア関係のところとの整合性。ＮＰＯとのパートナーシップや、公設民営などについては、武蔵野市は 30 何年前からやっている。そのへんは大いに誇るべきだと思う。本当に市民に任せてやっている。コミセンは全部、「自主参加、自主企画、自主運営」でやっているが、ほかのとこ

ろではこういうのはない。しかもそれを今まで続けてきているというのは誇っていいところだし、それをさらに充実させるのがこの委員会なので、その方向をどういう形で最後に提言できるかということ。

（井原委員）　ＰＴＡに関わっていて、青少協が近い存在だが、もう少し青少協が力を持てないのかと疑問に思う。中学生の居場所のこともそうだが、子どものこと全体を、武蔵野市の中で委嘱を受けてやっているところは青少協が一番初めに思い当たる。その中でコミュニティセンターそのものと青少協がどういうふうに連携しているのかが疑問。参考までに知りたいと思う。

（高田委員長）　いまこの地域でどんな問題があるのかを全部出してみるということが最初に要るのではないか。

協議会との意見交換会があるが、どの団体と意見交換をするのか。コミセンも外せないところだが、ほかのところも実際にどうなっているのか。そういう意味で皆さんの出身母体の領域から話が出てきて、いろいろな問題について言えるはずだから、どんどん出していただきたい。そのへんの問題を一回全部出して、それでやってみようと思う。

もう一つは、陳情のところで早めに決めなければならないところで、さっきの八幡町の建替えや、もう一つ境東部・境南町東部のことも出ている。これはいつぐらいまでにやったらいいか。

（事務局）　中間報告ぐらいまでに。

（高田委員長）　これは早くやっておかないといけない。例えばコミュニティの活性化をどうしようかというのは少し先の話だが、八幡町コミセンの建て替えをどうするかという話なら相当早く結論が出せるのではないか。それからもう一つの境東部・境南町東部の陳情にどういうふうに対応するかというところ。我々の手元に区域の図があれば、すぐにでも話ができるのではないかと思うが、どうか。

（事務局）　すぐできる問題があるということであれば、出していただいて構わない。

（高田委員長）　できるものを先に検討し、あとは先ほどの中学生など個別の問題を考え、それから武蔵野市のコミュニティづくりを検討していくのがいいのではないか。

（井波委員）　各協議会との意見交換会を次回行うのは早いと思う。一度はまず各委員の意見交換をやって、その上で各協議会に何を聞くのかある程度テーマを決めて、各協議会に投げかけないと、たとえ集まっても意見がまとまらないのではないか。次回は各委員で話し合ってはどうか。

（高田委員長）　同意。いま武蔵野市がどんな形になっているか、それぞれのところの領域では見えているかもしれないが、全部のところがはっきりしない。例えば八幡町の建て替えはすぐに結論が出ると思っていたが、建て替えするとしても、いまコミセンでいろいろな問題があるので、今度建て替えるに当たって、そういう問題にはどう対応できるのか。そういったものがあったほうがいい。

（事務局）　市長の方でも移転等については先行して議論をといっていたが、例えば２回目のコミュニティ市民委員会で結論が出てくるというと、本当に真剣に十分議論をしたのかという話にもなるので、そこまで早くなくていいと思う。八幡町の場合には、コミュニティ構想があって、建て替えという話だが、境東はコミュニティ構想の変更になるので、このへんは十分に論議をしていただきたい。

（高田委員長）　それでは最初の２回で境のほうと八幡を決めようかと思っていたが、それは置いておきたい。次回は皆さんが思っているコミュニティ、地域での問題点について議論したい。これは別にコミセンに限らない。

いま皆さんのところで問題になるなというものを３つか５つぐらい各自考えて出していただきたい。それぞれの立場からの問題点、武蔵野市のコミュニティづくりに対して長期というところも含めて出していただきたい。やり方はどうするか。まず時間を決める必要がある。

（事務局）　流れとしては、アンケートの時期や中間報告という大きなところは押さえていただければ、中は自由に変えていただいて構わない。

（高田委員長）　では委員による意見交換を１回か２回やって、その後に各協議会との意見交換会や、それから青少協を呼んでくれというのがあればそちらのほうを、福祉のほうをということなら福祉を呼ぶということでやっていきたい。

〇次回の委員会について

・次回日程について、9 月 30 日（火）18:30～に決定。

・各委員がコミュニティに関する問題点を一人３つまで提示し、事務局に送付することに決定。様式は自由で、項目とその理由を数行程度記入することとする。

第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

第２回委員会

議事要旨

日　　時：平成 20 年 9 月 30 日（火）18:30～

会　　場：武蔵野市役所西棟 812 会議室

出席委員：高田委員、江上委員、橘委員、島森委員、渡邉委員、井原委員、和久田委員、
　　島田委員、増田委員、清本委員、西村委員

議題

１．「武蔵野市のコミュニティ（センター）を巡る課題と問題点」について

・前回欠席の江上副委員長より自己紹介があった。

（高田委員長）　宿題として、武蔵野市のコミュニティ（センター）を巡る課題と問題点を書いていただいた。それについて、書き足りなかった部分、誤解を招きそうな部分を言っていただきたい。

（橘委員）

まず、設立されて 35 年の歴史があるにもかかわらず、市民の中にはコミュニティセンターというのは何をやっているところなのかという意見がたくさんある。利用者が一部の方に限られている。利用を増やすために各コミセンもいろいろと工夫しているが、なかなか広がっていかない。

コミセンは、何をやるべきなのかということにまだ迷いがあるのではないか。事業をやって人を集めることだけがコミセンの仕事ではない。自然に地域の人たちが集まって、コミュニケーションを図るためにある施設だと思うがそうならない。何か仕掛けを作ってやらないと、集まってくれない。その辺がコミセン自体が抱えている１つの問題。

３番目、コミュニティ条例の中に、地域コミュニティと同時に新しい概念として目的別コミュニティと電子コミュニティが規定されたが、実務をやっている上で、ピンとこない。実際の動きとまだリンクしていない部分があると思う。最終的には地域に根ざしたコミュニティが中心にならざるを得ない。電子コミュニティといっても、ある意味で薄っぺらな

ものになりがちだと思う。目的別といっても単発的なもので、継続性のないコミュニティになりそうだという感じがする。

（高田委員長）　知らない人がたくさんいるということについて何かデータはあるのか。

（橘委員）　データはないが、いつもコミセンに来るメンバーはほとんど同じである。一方で、演劇のグループで、ほとんど地域の人ではないのだが、名前を変えて同じメンバーがコミセンを渡り歩いており、多少問題だと感じている。

（高田委員長）　ではアンケート調査項目に、「コミセンをご存じですか」という項目を入れることにしたい。

（高田委員長）　次、島森さん。

（島森委員）　１番、乳幼児を持つお母さんたちの利用について。コミュニティセンターを始めた当初は、お子さんたちを連れたお母さんたちもかなり来ていたが、最近の様子を見ると、小さいお子さんのお母さんたちの利用が少ない。前より減ってきたのはなぜか。また、子どもルームがあるのに使われないのはなぜか。

０１２３といった乳幼児の施設ができたからだろうか。そういう施設ができて、いい面もあると思う。子育ての知り合いになれて、悩みなどをお話しできるお母さんもいると思うが、コミセンは近くて、すぐに行けるよさがある。コミュニティセンターの子どもルームも大いに活用していただけたらと思う。

そのためにはどうしたら、もっと活用が活発になるのかということを、けやきでも模索している。今までやっていなかった親子広場もやってみようではないかということで、市のほうに相談した。そういうことを取り入れながら、市の方たちに任せるのではなく、できればコミュニティセンターの者も参加して、お母さんたちの様子や生の声を聞きたいと思っている。地域でお母さんたちが知り合って、子育てをしながらコミセンを活用し、コミセンの活動にも関わっていただき、地域のことに関わっていただくことを願っている。

２番は、中高生の居場所ということ。けやきにも中高生はたくさん来ている。中高生、特に中学生が、物を壊したりするのだが、そういう時に出入り禁止にすると、行く場所がなくなってしまう。そういう子どもたちが、たとえば駅のほうのあまりよくないところに行ってしまう可能性がある。それだったら、コミセンにいてくれたら、注意しながらでも、話をしながら中高生の顔を知ったりして、そういうことを地域でしていければ、そう悪い方向にすぐには行かないのではないかということを期待してやっている。

ただ、問題点がある。中学生がたくさん増えてくると、大人の人たちが入りづらい、もう少し静かなところに移動しようといった点が見受けられる。大人も大切にしなければいけない、子どもも守らなければいけない。部屋が限られる中で、どうすればうまく使えるのか、専門的なところを設けたほうがいいのか、たとえば曜日で分けて、子どもたちが使えるようにすればよいのかといった、何か方向性が分かれば、皆さんの意見を聞きたい。

３の、館の用途変更について、これは時代にあった、ニーズにあった部屋ということ。この頃は、お年寄りの方は和室より洋室の椅子のほうが楽だということもある。しかし、和室をみんな洋室にしてしまったらどうなのか。和室のよさもある。

乳幼児などは畳の部屋で這うことが非常にいいということを専門家に聞いた。だから、畳の部屋を全部なくしてしまうことはできない。できれば、将来、直すようなことがあれば、洋間にするなり、広げるなり、使い方にあった部屋が欲しいということがある。

けやきは音楽、コンサートなどをやると多くの人が来てくれるが、入りきれる部屋がなく、よそを借りることになる。しかし、毎回借りるとなると、また違ったものだということで、その辺も考えている。あとは、改築しなくても何かできる方法はないかということも考えている。

４は、コミセンとしての防災役割。大きな地震がいつ起きるか分からないということで、常に考えておかなければいけない。防災課のほうに勉強をしに行ったりしたが、隣近所を知っていて、誰かがいないという時にみんなで声をかけ合って助けられる。コミセンがイニシュアティブを取ってやるのではなく、組織を結ぶようなことがコミセンの役割なのではないかということが１つある。コミセンがいろいろなところに声をかけて、他団体の方とつながって防災組織が地域の人たちで少しでもできていけばと思う。

追加で、他団体との連携というのは、防災以外にも、社会福祉協議会など、いろいろな団体と、どう関わっていけるのかについて話をしていけたらと思う。

（高田委員長）　次の中学生について、中学生対策ということは何か考えているのか。

（島森委員）　やはり、話ができれば話をして、とにかく顔見知りになることが先決。

（増田委員）　私の知る限りでは、中学生は部活や塾に行っている時以外の時間は、友だち同士で集まって、コミセンや総合体育館などに行く。総合体育館はスポーツをする目的でないとあまりいられないという感じである。物を壊したりする子は出入り禁止のような感じになってしまっているようだ。そうすると、本当に行くところがなくなってしまい、

コンビニの前の広いスペースでたまってしまったりすることがある。

中学生だけの居場所を作ったほうが丸く収まるのではないかという気もするが、いろいろな年代の人と触れ合うということもとても大事なので、何とかコミセンで子どもたちの居場所を作っていければと思う。

（清本委員）　和室について。最初に作られた時は年寄りが畳の部屋がいいという発想で、高齢者のために作られたようだ。しかし、自分が年を取ってみると、正座をするとか、座るというのはすごくつらい。最近は高齢者の方も「畳の部屋はいやだ」という方が多い。西久保コミセンなどは畳の部屋に椅子を入れられるようにして、両方使えるようになっている。

乳幼児などは畳の部屋は危険がなくていい、椅子だと落ちたり転んだりすることがあるが、畳の部屋は遊ばせておくのにとてもいいという話も聞いている。従って、高齢者から乳幼児を連れたお母さんへと用途が変わっていく。

（島森委員）　けやきは１階に乳幼児の部屋がある。２階に和室がある。乳幼児の部屋を２階に持っていって、１階に高齢者の部屋を置くといったことができるのかどうか。そういうことも含めて、改築や改装などの大きなこと以外でも、変えることは必要だと思う。

（高田委員長）　畳は敷けるだろう。

（島田委員）　乳幼児の話について、データをつかんでいないから何とも言えないが、昔と家族というものが変わってきているのではないか。たとえばお母さんが働きに出る人が多いので、参加しづらいのではないか。

（島森委員）　その通り。

（島田委員）　そういうこともデータを使ったらどうか。

（和久田委員）　中央コミセンでは福祉の会が主催して親子広場をやっている。中町集会所では市の主催で、保育士の方が来てやっている親子広場がある。大盛況である。福祉のメンバーが子どもたちを見ている間にお母さんたちの交流ができたり、とても楽しそうに話をしている。また、人生の先輩というか、私たちにも何かある時には聞いてくる。そういうことで、かなり利用が多い。

（高田委員長）　それは 10 年前、15 年前と違ってきているということか。

（和久田委員）　福祉の会のほうは１年前に、中央コミセンでは１年半前ぐらいから開くようになった。その前に３歳未満の子どもさんを連れた人たちが来られて、「ここのコミセンは遊ぶ場所がないのですか」とずいぶん問い合わせがあり、それでこういうことを開く

ようになって、ずいぶん利用が多くなった。

（高田委員長）　では渡邉さん。

（渡邉委員）　第五期コミュニティ市民委員会答申が平成 12 年７月に出た。それから今日までのコミュニティ活動やコミュニティづくりの進化について、総括する必要があるのではないか。第五期委員会でも、「コミュニティ構想を理念として、市民参加で推進してきたこれまでの実績を踏まえ、21 世紀のコミュニティづくりのあり方について具体的な提言をされた」と書いてある。それが生かされてきたかどうかという視点から総括すべきではないか。

具体的には、その後の情勢の変化や主体的努力を見据えながら、前期答申が期待した関係主体の役割が期待通りに果たされてきたかということを検討する必要があるのではないか。そこでは５つに分かれている。市民の役割・コミュニティ協議会の役割・行政の役割・コミュニティセンターの役割・コミュニティ研究連絡会の役割、ということで、１つずつ挙げて、それぞれ関係主体の期待されるべきあり方について答申してある。ちょうど８年経過したわけだが、その中での情勢変化と主体的努力の例示として６行掲げた。

そして新たな情勢の中で、第４期長期計画・調整計画の 59 ページに提起されている。それが基盤となって、この市民委員会が発足したわけだが、その中には、コミュニティの活性化とあり方、コミュニティ活動の質の向上、コミュニティとコミュニティセンターのあり方、管理・運営の改善、ということが検討されるべき課題だと指摘されている。そういうことを、具体的な事例を含めて検討していったらどうかということが、１つの考え方。

同時に、コミュニティとは何か、コミュニティ活動とは何か、自主三原則とは何かということについて、共通の認識に立つことがあれば、コミセンの運営についても、何をやるにも、目的を明確にする、常に意識してやるということが非常に大事だし、コミュニティ活動のあり方として重要ではないか。

最後に、八幡町コミュニティセンターの移転・新築について。当協議会では、これからのコミセンのモデルになるようなコミセンを作っていこうと、他のコミセンを見学・視察したり、運営委員会を開いたりしている。当委員会でもこれからのモデルケースになるようなコミセンをという議論がなされ、八幡町のコミュニティセンターの移転・新築に投影されれば、市全体のコミュニティ活動、コミュニティセンターのあり方について、有益なのではないか。

（高田委員長）　八幡町の新築について、具体的にこういうことをやろうといった設計、必要なもの、部屋の使い方などの話は出ているか。

（渡邉委員）　まだ青写真が作れる段階ではない。他のコミセンや施設を回って、研究しているところである。

バリアフリーやエコを含め、大きなものを項目ごとに分けて、各コミセンのやっていること、悩んでいることを調査している。

（高田委員長）　コミセンの施設の最低必要条件のようなものを、われわれが考えたほうがいいのか。

（渡邉委員）　モデルというのは、地域ごとの特性があるので、おしなべてのモデルではなく、地域的格差のある中の小さいところ、しかも全体のコミュニティ活動に共通するようなモデルにしたいということ。たとえば建物そのものがバリアフリーであるとか、エコの建物を率先してやるとか、いまある環境問題も含めて、建物の中に体現していきたいということが、今までの議論になっている。

（橘委員）　コミセンの具体的なハード、建物を設計するような場合には、地域の方々の意見を聴取して、それが調和されたものが今の建物だということになっているが、実際は地域の中で声の大きい人の意見が通る形になって、いまもって残っている部分がある。それが結果的に禍根を残している。これから新しく作る場合には、一部の声の大きな人の意見に流されない方がよい。

（高田委員長）　第五期と第六期の間の総括をして、そして進め、というところがある。この辺は、どう変わったかというところだろう。この辺は文章の中に入れてはどうか。

では次。井原さん。

（井原委員）　２つの項目を挙げた。

１つ目は、コミュニティの見通しが持てないこと。コミュニティとは何かということを考えると、近所づきあいも入るのではないかと思う。

子どもを持ってからの自分を考えると、幼稚園や保育園で知り合ったお父さん、お母さんたちとの付き合いが第一に始まる。

小学校に上がるとＰＴＡ活動や保護者会で知り合いになっていく形になるが、それがこの先どのような形になっていくのかが想像がつかない。

私は武蔵野市で生まれて、ずっと育ってきた。子どもの頃住んでいたアパートに、結婚してから住んだ。そうすると、近所のおばさんたちが残っていて、「井原君が戻ってきたと、

噂になっていたのよ」といったやり取りがあった。その時初めて、自分がいたことの意味、そこに住んでいてみんな知っていてくれたのだなと思ったのだが、ではいま、果たして自分が実際に子どもと一緒に住んでいるところで、そういったことがこの先続いていくとは思えない。

何のためのコミュニティなのか。やはりきっかけとしては、たまたま偶然居合わせたというところから始まって、そこから発展していくことが１つある。コミュニティという言葉の意味がまだよくつかめていない。

子どもの頃から友人たちと芝居をしてきた。調整計画の言葉を借りるなら、目的別コミュニティに当たるかもしれない。そんな中、私の活動の中心は私であって、コミセンを中心として活動していたわけではない。見通しが持てないという時、コミセンがどう関わっていくのかということが実はよく分からない。

2 つ目、コミュニティセンターの使い勝手に関しては、あくまでも自分が使ってきた時の感想である。音楽室を使う時に 5 人以上という人数制限が当時はあった。いまあるのか分からないが。そうすると、当日借りであれば借りることはできるということだが、ソロの人や、２人、３人しかいない人はどうなのかと思った。

また、音楽室だが、基本的な設定として、テーブルとパイプ椅子がすでに配置されていた。脇にあるのなら分かるが、すでにロの字型に配置されて、会議室の代わりになっていた。現在どうなのか。

それから、子どもが生まれて父母会の集まりなどでコミセンを使うようになったが、子どもだけで使える水回りが少ないと気が付いた。トイレも、水道も。せめて小学生低学年の子どもでも使える水回りがあるのか。

改修する場合には、子どもが使える水回りができるよう考えるべきではないか。

（江上副委員長）　井原さんのお話をうかがっていて、多分コミセン関係者が一番見えていない部分を実は見ていると感じた。皆さんは一生懸命やっていらっしゃる。しかし、それ故にだんだん見えなくなってきてしまう部分、盲点のようなものができてくると思う。その辺も見る必要があるということだと聞こえた。

（橘委員）　コミュニティセンターの立場からすると、よく１人で貸してくれと言われるが、お断りしている。１人ではコミュニティにならない。ソロ活動という話もあったが、１人のために、ある施設を提供するということは、本来のコミュニティセンターの主旨からするとよくないのではないかということがわれわれの考え方である。

（島森委員）　けやきもそうである。やはり１人でも多くの人に使っていただきたいということと、１人ではコミュニティではないというところもある。

（井原委員）　たしかにそういう原理原則に則っていれば、そういった運営の仕方になるのだろう。

（橘委員）　やはりどこかで仕分けをしないといけないと思う。

（西村委員）　子どもの水回りのことだが、子ども用のトイレや手洗いを置いたのは東コミセンである。よく考えて児童室に置いたが、トラブルが続いて、何年か後に片付けた。他にそういうところがあるかどうかは分からないが、南町のように子どもがたくさん使っていると、踏み台を置くということもあるが、あるといいと思うことはある。しかし、東コミセンの例を見ているので、そこまで要望したことはない。

（橘委員）　当コミセンの場合は水飲み場に踏み台を置いている。子どものために部屋を別にしてということは、今の状況からすると難しいと思う。せいぜい踏み台を置くぐらいのことかと思う。

（島森委員）　けやきでは、外に「赤ちゃん池」というものがあった。小さい子が遊べるぐらいの水を張っていたが、最近衛生面でのことが言われ始め、やれなくなってしまった。

（橘委員）　砂場なども同じである。

（高田委員長）　次、和久田さん。

（和久田委員）　地域社協の人たちのご意見をうかがってここに載せた。地域社協とコミュニティが話し合う場がなかなかなくて、たとえばコミセンの場所を借りる時、福祉の会でお年寄りの会をする時でも、朝早く、６時ぐらいから並んで場所を取る場合があるので、一体化を図って話し合いをしたらいいのではないかということが出てきたと思う。

コミセンが地域のまちづくりの核となるようにということは、ずっと言われている。なかなか核となるのは難しいと思って、いろいろな団体と連携を取りながらやりたいと思うが、その辺ができない。私が関わっている中央地区では、地域の人と一緒に防災訓練をやった時も、地域の団体と連携を取るのが難しいということがあった。こういうところでコミセンが核になってくれるといいと思う。

福祉の会の拠点を望む、というのは、コミセンの中で荷物を預かっていただけるところと、ないところがあって、ないところは非常に困っているので、こういうことが出てきた。

コミセンと地域福祉の会の地域が一致しないところがあるので、この辺のところも難し

い部分。資料５でかみ合わない部分が出てくるので、そういったところが難しい。

個人的には、コミセンとしては運営委員のなり手、特に若い人のなり手とか、活性化を図っていないということがある。同じメンバーでやっていることで、事業でもあまり変化が見えないことがあると思う。

建物に関しては、エレベーターは各コミセンにあったほうがいい。お年寄りが１階の部屋しか使えず、２階、３階に上がれない。来ても会議が３階であるのなら「帰ります」と言う方もいるので、やはりエレベーターは必要。お年寄りが上がるためだけではなく、たとえば荷物を下におろす時にも必要。

（高田委員長）　地域社協とコミセンの重なりは、大野田が一番難しい感じがする。

（和久田委員）　重なったりしているところがあるので、非常に難しい部分がある。

（島森委員）　優先的な利用というのは、どういうことか。

（和久田委員）　たとえば総会やお年寄りのお食事会を開催する際に、会場を優先的に利用させてもらうということ。優先的にできないコミセンもあるため、大きな会をする時は朝早く、６時ぐらいから並んで会場を取るという状況がある。

（島森委員）　現時点でも協力できる点は、ということで徐々に変わっていると思う。それ以外に、拠点ということで、何か望んでいることはあるのか。コミュニティセンターの中で、たとえば窓口の仕事があるが、福祉の会のことを知っていなければいけないということになると、大変ではないか。拠点というのはどこまで考えているのか。

（和久田委員）　たとえば出欠を取ったりするところでも、コミセンの窓口で対応していただけるところと、そうではないところがある。ただ、コミセンの窓口と福祉の会とは全然違うので、私が携わっているところでは、答えられない問い合わせがあれば、福祉の会の担当者に電話をもらうようにしている。そうではないところがあるので、コミセンとは別に拠点があったほうがいいのではないかという話もよく出ている。大野田かどこかで、少しずつ話を進めているところもある。

（西村委員）　コミセンと地域社協との関係というのは、何年来話題になっているが、町によって違う。南町は福祉の会とコミセンがとてもうまくいっている例。たとえばものを置くとか、部屋を優先的に貸す、南町福祉の会は、無条件で月に何度でも借りられるといったことができている。こういったことは両方が合意すれば簡単に進む。拠点ということの意味が地域によって違うと思うので、この問題はかなり丁寧にやらないと。コミセンではない別の拠点という時には、その中身がいろいろあると思う。

（高田委員長）　これは、このあと問題になるだろう。

（清本委員）　長期計画の調整計画を作る市民会議の時に、やはり福祉の方たちから拠点作りの話はずいぶん出ていた。それ以外にも、拠点が欲しいということで、たとえば子育てのグループや高齢者の方でも、そこへ行けば誰かと出会える、いろいろな情報が得られるという意味での拠点作りというのは、市民会議の中で出てきている。

ただ、コミュニティセンターにそれを求めるのは、無理があるような気がする。本来ならば、コミュニティセンターが拠点になることが望ましいと思うが、コミセンへ行って福祉の話を聞こうと思っても、福祉の方がそこにいるわけではないということで、そういう意味では、体制を変えない限り無理だと思う。

（高田委員長）　今のコミセンは拠点になっていないということか。

（清本委員）　拠点になっていないコミセンもたくさんある。たとえばここに道路ができるのだが、大気汚染の問題をみんなで話し合いたいと思って、持ち込んでも問題化してもらえないとか、そういう意味では地域の拠点にはなり得ていない部分があると思う。

（西村委員）　なり得るコミセンもある。

（清本委員）　たとえば南町やけやきなど、いくつかそういうコミセンはあるが、実際問題としてそうなり得ていないコミセンのほうが多いと思う。

（高田委員長）　その辺は、あとのところで。コミセンと地域社協、コミセンは本当に地域の拠点になっているのかというところは、あとのテーマにしたい。次、島田さん。

（島田委員）　コミュニティとは何かというとらえ方を、私としてはこういうふうに考えたとご理解いただければと思う。

自主参加・自主企画・自主運営ということでコミュニティセンターができているのはすばらしいことだと思う。ただ、そうは言ってもある義務を負うのではないか。たとえば参加者が少ない、それをどうしていくかというのは、義務として考える。答があるかどうかは別だが、常に何かトライをしていくということが１つあるのではないか。

もう１つ、コミセンというのは市からお金が来ているので、こういうものをいかに減らすかという努力もあっていいのではないか。

それから地域の安心、安全を確保するようにどのようにしていくか、別の言い方をすると、コミュニティのセンター、そんなセンターになる必要が、私は義務だと思ったのだが、行政と住民の間のパイプ役をするというとらえ方はどうだろうかということである。だから、コミュニティセンターがどういうものになるのかというと、センターだけではなく、

コミュニティがある。たまたま居場所としてコミュニティセンターを使うというとらえ方でどうだろうか。

先ほどもあったように、災害時のネットワークをどう作るのかや防犯パトロールや交通安全、清掃など、こういうものをまとめるセンターになるのがコミュニティではないか。

３番目、こういうものは全てお金を使ってやるものだから、「はい、分かりました、ではやりましょう」というだけではない、やはり評価基準を作っておく必要があるのではないか。

４番目、コミュニティの活動の活性化という面で、一部のところでは、運営委員に困っている。これをどう広げていくか。

それからコミュニティのセンターだと考えると、コミュニティというのは行政で言えば各町がある。こういうところをうまくまとめて、全体をもう少し広げることができないか。

また、若い女性に聞くと、運営委員会というのはなかなか日の設定が難しいようである。開催日について、土曜日がいいという人もいれば日曜日がいいという人がいて非常に難しいと思うが、休日の昼間にやると少しは出られるのではないかという声もあった。

武蔵野市には町会のあるところとないところがある。こういうものをもう一度復活できないかという思いがある。私は民生委員という立場でここに出ているが、民生委員も基本的に困るのはこういうことである。全体をどういうふうにつかむか、皆さんの協力をどう仰ぐか、非常に苦慮している。

（高田委員長）　民生委員の区分けというのはあるか。

（島田委員）　３つの大きな民協に分かれている。第一、第二、第三で、東側と真ん中と、西。

（高田委員長）　細かいところはないのか。

（島田委員）　細かいところは丁目ごとに１人１人決まっている。

（高田委員長）　先ほどの評価基準だが、これは評価委員会がある。また、各コミセンが自己評価というものを毎年やっている。これはいいと思っている。

（橘委員）　コミセンを評価しようということが、ある時期から言われ出し、評価委員会ができた。外部評価はなじまないと思っている。ボランティアでやっていることだから、評価されてまでやることはできないと考えている。

われわれは自己評価を毎年やるが、それは自分がやったことに対して自分たちが評価する。自分のところの問題として、自分たちがどういうふうに反省していくか、本当にでき

たかどうかということを自分なりに考えてみるという１つの仕組みはできているので、それは非常にいいことだと思う。われわれは自分なりに毎年定期的に反省しながらやっているということである。

それから、丁目ごとに運営委員を出すという意見もあるが、自主参加、自主企画、自主運営という三原則に反している。強制的に出さされているという実態である。出席率も悪いと思う。義務的にただ出さされているということではだめ。自分からやりましょうということでやるのがボランティアだと思う。

運営委員会をいつ開催すればよいかについて。当コミセンでは月曜日の休館日に開催している。お勤めの人もいるので、３回に１回ぐらい夜に開催してみたこともあるが、だめだった。むしろ朝の９時半からお昼までということで開催し、常に出席率は 95%、24 人のうち欠席は１人か２人である。

（清本委員）　境南コミセンでは確かに丁目から運営委員を出すが、強制的に出ているわけではない。最初に丁目ごとの会合があり、そこで手を挙げた方が運営委員になるのであって、強制的に出されている意識はない。

先ほどの町内会ができないかという話だが、資料６は市の職員の研究会から出されたもので､大変参考になった。１ページにコミュニティ構想の出発と変遷というところがある。そこには市民自治の理想と町内会、戦争中の隣組の否定から出発したということが書かれている。

また、これは職員だけの研究会のものなので、大変おもしろい。非常に参考になるので、ぜひ皆さんご覧になっていただきたい。

（高田委員長）　それでは次。増田さん。

（増田委員）　印刷機がコミセンに設置されていないのが不便。少年野球や少年サッカーなどの、市で認められている活動をしている団体でも、会員募集のチラシやお知らせを印刷できる場所がない。印刷できる場所がないので、結局、いつも都営住宅の集会室にある印刷機を 500 円で借りて印刷している。印刷する場所が近いところにない、少なくともその時にはないと思った。

（清本委員）　市役所内の市民協働サロンなど、いろいろなところにある。

（増田委員）　コミセンだと、それぞれの地域に１つずつあるので、２、３館に１館程度設置すると、頼りになるコミセンになると思う。資料によれば一部に設置されているよう

だが、「わたしの便利帳」にも載っていないし、市のホームページを見ても掲載されていない。もう少しＰＲが必要。

２つ目、小中学生が楽しく通えるような設備やスペースが不足しているのではないか。中学生や小学生が柳沢児童館を利用していることがあるようだが、児童館は桜堤にしかないので、コミセンに児童館的な役割も必要ではないか。

それから、自習室だけでなく、子どもたちが集まって宿題をしたり、試験勉強をできるスペースがあるといい。

３つ目、市民団体の活動中心で、単なる部屋貸しの場になっていたり、行く人が決まっているように感じている。

コミセンは町内会的な役割を担っていると聞いたので、世代を超えて交流できて、寂しい時にぶらっと行くと誰かしらいるというようなコミセンになればいいのではないか。近所のおばさんやおじさんと気軽に交流できたり、ボランティアが宿題を見てあげられるような、軽い寺子屋的な役割もあるといい。

０１２３に通っていて、子どもが４歳になると通えなくなってしまうが、親子が休みの日などに行ける場所がなく、困っているという話も聞いた。すき間から漏れた人たちが気軽に行ってくつろげる場所であればいいのではないかと思う。

コミセンで小さな講演会を開いて欲しいという意見を聞いた。そのあと少人数で円を作って話をできるような機会があるといいのではないか。市の主催の講演会だと、大規模になってしまって、そういうことができない。そこからまた新しい活動が生まれて、コミセンに行く人が増えるのではないかと思う。

（清本委員）　コミセンに印刷機は。

（西村委員）　境南と東と南。それ以外は増えていない。かなり前にその３館が印刷機を入れた。けやきはあるが、これには載っていない。

（島森委員）　あるが、近いうちにはなくなる状態。リース代などいろいろなことを考えると、コピーのほうがそれほど変わらないという面もある。

（西村委員）　南町は、何年かかけて導入したが、本当によく使われている。市役所が近ければ、協働サロンがある。

（清本委員）　境南は新しいものを入れてもらった。要望は強かった。境南は市民会館にも遠い。協働サロンは、市役所にあって、版下代だけでインク代がいらない。いま一番市内で安い。何千枚も刷りに来る方もいる。

（清本委員）　増田さんの３番目のところ。ぶらっと行けるコミセンになればいいということがある。これは市民会議の中でも出てきた問題。

（西村委員）　南町コミセンは広いサロンがあるので、端にちびっ子広場というものを置いていたものがそのまま常設になってある。就学前のお子さんと親、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんと孫が実によく使っている。

それ以外に、ふらっと来て、あるいは友だちと待ち合わせてということだと、お茶の１杯も欲しいということがある。それでコミュニティカフェのような考え方は、何年か前から当コミセンでもあったが、いろいろとバリアが高く、現在は月に１回「みーなカフェ」ということをやっている。みーなカフェに来た方からは「いつもあるといいのに」と意見がある。こういったことも、コミセンが居心地のいい場所になる取り組みの１つ。

（高田委員長）　地域の拠点として、気持ちのいい場所、居心地のいい場所と。

（西村委員）　拠点という言葉はちょっと固すぎるので、たまり場とか、居場所とか。

（島森委員）　けやきコミセンの中では、いま、月１回、第３土曜日に男の人たちがコーヒーを入れるという活動がある。「けやき茶社」と言っている。

男の人たちがやっているということで､男の人も興味を持ってくださるのではないかと。これからますますリタイヤして、地域のことにも関わってくるような方が来てくれるのではないかという期待もある。そういうこと１つが、ぶらっと寄れるよさにもなると思う。

けやきには自動販売機が置いていないので、代わりに無料で麦茶を置いている。そういうものを用意して、誰でも寄れるようにすることも１つの工夫だと思っている。

（清本委員）　けやき茶社は、とてもすてきな取り組みだと思う。

（島森委員）　男の人たちは、女の人たちがおしゃべりするような場所が普段ない。男の人も情報を得たり、逆に自分のことも話したいと思う人もいると思う。

（高田委員長）　では清本さん。

（清本委員）　コミュニティ構想の中で、市民施設という言葉が出てくる。市民施設というのが、どうしてコミュニティセンターなのか。いろいろな種類の市民施設があってもよかったのではないか。境南町１丁目というのは、市の施設が何もない。しかし、集まる場所が欲しいという陳情を出した時に、「集会施設というのは、市の施策の体系の中にない」と言われた。施策の体系というのは、つまりコミュニティセンターだけしかないというわ

けである。市民施設という言葉が出ているのに、どうしてコミュニティセンターになってしまったのかと、疑問を持った。

２つ目、市の大きな施策として、コミュニティ行政があるわけだから、そこにもう少し市が意見を言う。自主企画、自主参加、自主運営という三原則があるが故に、市の方はまったく手が出せないという感じだが、どんどん意見を言ってくれればいいと思う。

３つ目、コミセンの発信力を高めることについて。コミセンから離れたところに住んでいると、コミセンで何をやっているかということが、ほとんど聞こえてこない。前は掲示板などもあちこちにあって、使っていたような気がするが。また、ホームページを使って発信したらどうか。少し発信力が弱いのではないか。

（高田委員長）　市民施設について。最初の時のコミュニティ構想の時に、市民ホールなどがあった。市役所とセットで作るといっていたものが、立ち消えになった。他に、市民施設というのはどういうものがあるか。

（清本委員）　社会教育施設として市民会館がある。

集会所とか集会施設というと、「それは武蔵野市の施策の体系にはない」と言われた。

（江上副委員長）　いつ頃の話か。

（清本委員）　つい最近である。それだと政策を変えなければだめだという。どうして集会所はだめなのかというのがよく分からない。

市の方がどのように考えているのかということがある。陳情とも関係がある。「集会施設が欲しい」と最初に言ったら、市のあるところで、「それは施策の体系にないからだめで、コミセンの分館ですね」と言われた。しかし、コミセンではなく小さな集会施設が、どうしてだめなのかということが、よく分からない。

（高田委員長）　境の東部地域にコミュニティセンターを設置することに関する陳情か。

（清本委員）　それはコミセンになっている。それをコミセンという文言にする前に聞きに行ったら、集会所というのは市の施策の体系にはない、と市の方が言っていた。

（高田委員長）　ということは、この陳情の意味は、コミュニティセンターを設置するとあるが、集会所なのか。

（清本委員）　本心は集会施設である。

（江上副委員長）　集会施設とコミセンをどのように区別しているのか。

（清本委員）　三鷹などにあるものは、普段は無人である。

（江上副委員長）　三鷹の場合、地区公会堂と言って、32 ぐらいある。町内会に鍵の管理

を委託していて、使いたい人は町内会で鍵を預かっている人のところに行って、借りて開けて使う。

（清本委員）　かなり武蔵野市民が使っている。私のところは三鷹市とボーダーライン上にあるので、三鷹のほうが近い。武蔵野のコミセンに行こうと思うと、境南だと、私の足で歩いて 20 分ぐらい、西部コミセンも 25 分ぐらいかかる。

（江上副委員長）　三鷹の地区公会堂のイメージか。

（清本委員）　その通り。しかし、そういうものはだめだと。市民施設がコミュニティセンターでなければいけないということが、理解できない。

（島田委員）　コミセンの運用方法が変わればよいのか。

（清本委員）　距離の問題である。

（島田委員）　たとえば分館のようなものがあって、それをもう少し自由に使えればいいのか。

（清本委員）　分館ができれば、分館でももちろんいい。

（増田委員）　境南地区にもう１つあればいいということか。

（清本委員）　自分たちの近くに集まる場所が欲しいということ。歩いていけるところで。運営主体がないからだめだと。三鷹では完全な貸部屋である。鍵を開けてきれいに掃除をして帰るということだから、コミセンもそういう機能を持っているが、もっと極端にしたものである。

（事務局）　長期計画上、市民施設ということがコミュニティ構想にあるが、これは長い歴史の中で積み重なってきている。もちろん二期の時にコミュニティ構想というのがあったが、第二期、第三期、第四期と流れてきて、その中で、市民施設という言葉ではないが、武蔵野市として特定の方、特定の年令、特定の性別の方々についての、単独館は作らないという方針が、長期計画の中でずっと流れてきている。子どもさんから高齢者まで、全部コミュニティセンターに集約するものだという形で、ずっと流れて来ている。これがコミュニティ構想である。

それ以外に第二期の長期計画の中では、三層構造というものをやって、地区にあるもの、それから三地域圏にあるもの、それから全地域的に１館ですむもの、という形でずっとやってきたので、その中での、今のコミセンの位置ということである。境東はコミュニティ構想にはないから、たとえば境東にコミュニティセンターを作るということになれば、コミュニティ構想を変える必要があり、かなり大きな問題であると認識している。

また、三鷹市のような、単独の集会施設を作ろうというのは、この長期計画の中にも調整計画の中にもない。だからおそらくないと言ったのだと思う。それは、今後どのようにしていくかは、基本構想、長期計画、調整計画の中で考えることである。ここの中では、身近に居場所を、という考え方が出ている。居場所を、という意見があっても、それが三鷹市のように集会施設をこれから作っていこうというところまではいっていない。

（清本委員）　ただ、そういう場所があれば、無人にしようといっているのではなくて、たとえばそこに運営母体を作って、そこで居場所を作る、そういうものができると。しかし、コミュニティの分館を作るためには、いろいろと面倒な手続きがある。

（事務局）　この陳情を見ると、境東と境南町東部にコミュニティセンターを設置することに関する陳情となっているので、今あるコミュニティセンターをつくって欲しいという話だととらえていた。今初めて、集会施設のような、自主管理でもいいということなのだと理解した。

（清本委員）　そういうことである。

（橘委員）　三鷹はなぜ30何箇所もそういうものができたのか。

（江上副委員長）　もともと町会の集会所を転用したところもあるが、新しく作ったところが大部分。三鷹の場合はコミュニティセンターが７つしかなく、その代わり大きい。プールも体育館も全部付いている。喫茶室のようなところもある。大きいところである。中学校区に１つぐらいしかない。そうすると歩いていけないという人も出てくるので、身近なところにサブの施設として、地区公会堂を作っている。１中学校区にいくつか。

（清本委員）　本当に近いところに３つぐらいある。

（橘委員）　集会所にするというのは、なぜコミセンではいけないのか。距離の問題があったとしても。三鷹のコミュニティと武蔵野のコミュニティとは、まったく生い立ちが違うから、これはある意味では仕方がないのではないか。

（清本委員）　距離の問題もある。コミセンから遠いところにいる人間にとって、コミセンは距離に比例して遠い存在である。

（井原委員）　単独館について、たとえば児童館は単独館にあたるのか。

（事務局）　その通り。児童館を３館作れという意見もあった。ただ、その時、長期計画ではそういう特定館を作らない方針なのだと、それがコミュニティ構想なのだということで、ずっと武蔵野市は発信し続けてきたということである。

（井原委員）　ということは、児童館のようなものは、逆にコミュニティセンターに求め

られていたことなのか。

（事務局）　第二期の長期計画の時から、３館作ったらどうかという話があったが、その時に策定委員で計画を作ったが、やはりコミュニティセンターに集約しているのだから児童館を増やすことはしないという決定をして、ずっと流れてきている。

（橘委員）　たとえばテンミリオンハウスなども特定館ではないか。

（清本委員）　児童館の要求はずいぶんあったが、そのつど聞いてもらえなかったというのが現状。

（井原委員）　新たに箱ものを増やして欲しいとは思わないが、逆にコミセンの中に児童館的な機能を集約するのだという話になったのであれば、なぜ今までできなかったのかということをきちんと検証する必要があるのではないか。

（清本委員）　やはり、子どもが来るとうるさいとか、中学生がたくさんいると大人が入りづらいとか、怖いとか、いろいろな問題がある。児童館というのはそうではなく、子どもの専門員がいて、ちゃんと子どもの面倒を見るわけである。しかし、コミセンの中では、なかなか一緒にならない。

（高田委員長）　次、西村さん。

（西村委員）　コミュニティセンターがコミュニティ活動の中心であるということを意識している市民が多くない。たとえばコミセンを場所として使っている方でも、コミセンのことを意識している人はそんなに多くなく、運営委員にはなかなかなってくれない。

市民と市長のタウンミーティングをコミュニティセンターで開催し、このことがコミュニティセンターが地域の問題を解決できる場であるということを、浸透させていくことに役に立つと思っていたが、ここのところがあまりつながらなかった。

２番目は、当コミセンでは役員や運営委員、協力員が 100 人以上いる。研修会もコミ研連であるが、１回の研修会では力が付くとは言えない。もっと市民が力をつけるような、学び合いの場、社会教育的な学習の場を、行政の責任でやってもいいのではないか。

３番目は、専門館の話とも関係してくるが、コミュニティセンターが企画を立てる時に、市の専門家にサポートしてもらいたい。今は、月に１回、親子遊びに来たり、児童館が年に１回、わいわい広場に来てくれている程度。前の市民委員会で出ていたような、専門館との連携、市の職員のサポート体制を仕組みとしてやって欲しい。

もう１つ、追加で、コミュニティ条例の見直しのことも視野に入れていきたい。たとえ

ば評価委員会だが、「コミュニティづくりを評価する」と書いてある。指定管理者制度で委託されている仕事についての評価は外部評価でいいが、まちづくりについては、外部の人には分からないと思うので、それも含めて。また、コミ研連の位置付けも含めて。先ほどの目的別コミュニティ、電子コミュニティも含めて、見直しがどこかで視野に入ればいいと思う。

（高田委員長）　３番で言われた専門家というのは、市役所の職員の専門家か。

（西村委員）　市役所の職員、あるいは市役所の職員が誰かを紹介してくれる、どちらも含んでいる。地域の中にいろいろな人材はいるが、みんな試行錯誤してとても苦労してきた。もう少しサポートしていただけたら大変ありがたい。

（清本委員）　そういうことが資料６の中に書いてある。市の方たちの反省ということで。

（江上副委員長）　武蔵野のコミュニティは30数年の取り組みがあるが、その中で市民委員会や、研連、研連の下部組織のあり方懇を始めて８年目になる。その上に、数年前からコミュニティ評価を始め、自らの活動を見直すチャンスを作って、少しずつ軌道修正をしてきている、そういう努力をしてきているのは、全国で多分武蔵野市だけ。その点は武蔵野のコミュニティが誇っていいと思う。

だが、この市民委員会で考えることは、これまでの延長上でいいのだろうかと思っている。そもそもこういう形の市民委員会でいいのかということを、本当は問わなければいけない。協働の時代と言いながら、行政は１人も入っていない。それでいいかということから本当は考えなければいけなかったと思う。

今、コミュニティが置かれている状況は、大きな曲がり角に来ている。たとえば、「新しい公共」ということが言われるようになってきた。これは前の市民委員会ではまだなかった言葉。市民協働という言葉はあったと思うが、「新しい公共」と絡んで協働ということが強く言われるようになってきて、はっきり施策の中にも出てきている。

また、地方分権の流れに乗って、都市内分権ということが言われるようになってきている。こうした新しい動きに対応するようなコミュニティでなくてよいのか。

ただ、武蔵野市政として、市民として、新しい動きに対応していくつもりがあるのかないのかということが問われる。もしこれまで通りでいいのだということであれば、これまで通りのコミュニティの議論でいいが、何か新しい状況に対応していくということを求めるのであれば、コミュニティについてもそういう視点から考えてみないと、少し足りない

議論になるのではないか。

「コミュニティとは何か」「コミュニティ活動とは何か」「コミセンとは何か」と書いた。これは２つの意味がある。もしそういう新しい状況に対応していくとすれば、今まで私たちが使い慣れてきたこういう言葉をもう一度考えてみる必要がある。もう１つの意味は、新しい社会に対応していくということは考えないとしても、ここで議論していく上で、この言葉がいろいろ混乱している。一度整理してから議論をスタートしないと、議論がかみ合わないということになりかねない。

追加で４つ目は、コミュニティ協議会とは何かということ。コミセンとは何かということとはイコールではない。

（高田委員長）　新しい時代の要請にあうところのコミュニティ、コミュニティ活動、コミセンとは何かというところを視野に入れながら論議していくべきであると。自分の身に付いた言葉でコミュニティを語る必要があるので、議論は必要だろう。

（江上副委員長）　第五期の委員会のコミュニティ市民委員会の答申には「コミュニティづくりとは、地域でいい関係を作ることだ」と書いている。言い得て妙だが、いまひとつよく分からないところがある。

（高田委員長）　１つ目、それぞれのコミュニティ地区があるので、その中のいろいろな団体が集まって、コミュニティ地区の長期計画を作ってはどうかということが１つ。

次に、協議会から、この地区内で地区のニーズに対応するようなコミュニティビジネスを立ち上げることができるか。コミュニティというのはお金を取ってはいけないということが原則なので、コミュニティビジネスなどは、もってのほかと言うことになるわけだが、地域の活性化を考える時に、こういう視点を入れてもいいのではないか。

また、コミュニティ活動の資金について。われわれは皆ボランティアでやっているが、資金源が問題で、たとえばイギリスなどではアセットマネジメントという形で、ＮＰＯが独立した形で、地域にサービスを提供しているということがある。

１つとして、１％税。これは自分のところの税金を払う時、１％を市民活動に使うよう定めるもので、使途は専門の委員会を作って決める。先行例はかなりある。そういう形で、安定した基盤の上に、自由にまちづくりをおこなうところまで広げていく。

具体的には、コミュニティビジネスで、コミュニティカフェでもやってはどうかというもの。

〇次回の委員会について

・今回の意見の論点整理を踏まえ、議論を深めることとする。